

会 報

昭和四年度総会は六月十五日（日）、大分市荷揚町、林業会館ホ
ールにて開催された。

○研究発表

- 1 速見地方の中近世墓棺について……………佐藤 晁
- 2 九州真宗史―九州に於ける浄土真宗の起源と発表……………百浦 保徳
- 3 我観―豊切支丹研究発展の概要……………立川 輝信
- 4 村明細帳の成立について……………佐藤 満洋
- 5 豊後森藩の農村……………勝 目 忍
- 6 豊肥国境論争 林野の所有関係を中心として……………野口 喜久雄

○公開講演

中津辞書の穿鑿 医学博士 辛島詢士氏

（講演要旨）

所謂中津辞書たる蘭語訳撰（一八一〇年刊）という日蘭辞書と、元
来和名はないが新撰バスタード辞書（一八二二年刊）と訳されるメイ
エル辞書を原本とした蘭日辞書の姉妹書についての穿鑿である。原本、
写本の種類・体裁・内容・所在を調べ、時代的位置と意義・応用並に
成立事情・著作者関係に及ぶ。後者のうち神谷ヒロシシに関して、
多くの資料を得ながら終に決め手がなかった。一般の蘭学は実用性を
特徴としているのに対し、中津藩の生んだ蘭学の始祖前野良沢の真骨
頂は蘭語学への専念―彼のオランダ語学という学問の純粹性への執
念―にあったと見ているが、その学統は中津藩に傳り、藩版に擬す
べきこの中津辞書が出来たものと思われる。この姉妹の辞書の監修者
と見るべき藩主昌高侯は大の蘭癖で、好んで江戸に存府して、その周
囲に蘭学が栄え、中津辞書の出版を遂げて、これをいささかの誇りと
したものであろう。時に、中津藩の事情、特に財政的窮乏に制約され
て、中津の蘭学は実用面に見るべきものがなく、この語学の面をも藩
内に弘布興隆というには到らなかったものと見たい。

○資料展示会

展示品 ①都甲文書四点 ②豊後国速見郡由布院御検地帳(田方、山崎村) ③天領日田の商人資料(③印、鍋屋の記録)一二点 ④津辞書関係資料四八点他 ⑤大分市勢家村駄原村明細地図(全)

○総会では、つぎの昭和四三年度事業報告がなされた。1、講演会、研究会の開催、2、機関誌の発刊(五〇号〜五三号)3、豊後国村明細帳四の刊行、4、史蹟実地調査見学旅行の実施(大野川流域文化探勝)5、大分合同新聞社主催伊勢神宮宝物帳に協力、6、その他

つぎに昭和四三年度、会計報告ならびに監査報告があり、それぞれ承認された。ついで同四四年度予算案と事業計画が審議された。印刷費等、諸物価の値上りにより、年会費五〇〇円を一、〇〇〇円に値上げする(ただし、四四年度は、明細帳を無料で差上げる)ことが上程され承認された。予算案は、年会費一、〇〇〇円、会費二五〇人、計二五〇万円を含む、総額五一万七、九〇〇円となった。

事業計画は、①、講演会、研究会の開催、②、機関誌「大分県地方史」(五四号〜五七号)続刊、③、「大分県地方史料双書」(「豊後国村明細帳」⑤)の続刊、④、実地調査見学の実施、⑤、美術博物館建設に協力、⑥、合同新聞宝物展に協力、⑦、文化財保護、庶民史料調査に協力、⑧、資料展示会、⑨、その他となっており、⑤では民俗

料室の設置を、会より要請することを議決した。(勝日記)

編輯後記

去る四十四年六月の本会総会後の反省会で、渡辺委員長が、本地方史もなるべく特輯号にしたいとの発言があった。たまたま今度発行の本地方史の編集担当順番が筆者と勝目分大助教授となっていたので、潜越とは思ったが独断で九月刊行予定の本号を、会の要望に添うべくキリンタン特集号とし、七月の下旬、キリンタンに関心を持つ人と思はれる各位に、無理とは思ったが七月末日までに原稿必着方を速達便でお願した。ところがこの失礼をもお怒りなく予期以上の原稿を得た。特にチースリック神父の七拾余枚を始め、松田毅一・岡本良知両先生旅先に居て依頼状をおくられて手にされた豊後キリンタンの開撰者、マリオ・マレガ神父等斯界の権威者各位の玉稿を得て、錦上花はなを添える光栄に浴し、且つ県内会員よりも多数の原稿を送られ、原稿多量で止むなく合併号とせざるを得ないうれしい悲鳴をあげた次第だ。然るに筆者運営の不手際から、五ヶ月後の今日漸く発行の運びとなったことは、御投稿下さった各位並に本地方史学会に対し、何とも申訳なき次第。只々平身低頭お詫びしてお赦しを乞うより外ありません。何とぞ